

【黙想会】2014年11月23日 御受難会 來住神父様 の 説教内容

## 王であるキリストの祭日（A年）

### マタイ 25章 31～46節

実を言うと、いま読まれた「羊と山羊」の福音は難物です。少なくとも、私にとってはずっと難物でした。今でもそうです。皆さんは、「そんなに難しいかなあ？」と思うかもしれませんが、飢えた人に食べさせ、渴いた人に飲ませてあげる……。それは当たり前だ。私たちがそれを実行しているかということになると怪しいが、言っていること自体はわかるし、キリスト者はそうあるべきだと納得している。後はどれだけ実行できるかの問題だ…そう思っていないですか？

しかし、話はそう簡単ではありません。聖書は、だいたいは味わい深く読んで、そして実行すべきものですが、時には、「ああでもない、こうでもない」と喰らいつき、格闘すべき相手です。

\*

なぜ難物かと言うと、この個所だけをそのまま読めば、私たちの人生は、ただ一つの基準、つまり「困窮している人たちを助けたか」という基準だけで測られることになりかねないからです。私たちのそれ以外の努力はすべて、神の前に何の価値もないのでしょうか。

結婚している男性であれば、まず家族を養う責任があります。そのためには、ハードワーク、長時間労働に耐えるだけでなく、仕事の渦中で起こる理不尽な取り扱いに耐えなければならないこともあります。主婦は、家族がそれぞれ勝手なことを言い、勝手な振る舞いをする中で、明るい態度を維持して世話しようとしてます。日々食事を準備する労苦と気遣いがあります。そういう務めを果たすことは、神の前に何の価値もないのでしょうか。

歴史上の偉人の話をしますと、私のヒーローは、二人の明治の文人、夏目漱石と正岡子規です。漱石は神経症に耐え、子規は脊椎カリエスの激痛に耐えつつ、長からぬ生涯で大きな業績を残しました。私は彼らを敬愛しています。しかし、彼らの努力の対象は文学であって、牢獄の人を訪問したり、貧しい人の援助することではありませんでした。この二人の文学的な努力と達成は神の前に無価値なのでしょうか。「呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ！」と言われてしまうのでしょうか。

また、身も蓋もない話をしますが、自分と家族の生活レベルを生存ぎりぎりにまで切り詰めて、それ以外の収入と時間はすべて困窮する人のために献げているという人はまず無いでしょう。大学に進学しなくても死にはしないけれど、やはり子どもは大学に行かせてやりたい。つまり、「もっと助けようとするれば助けることができるが、私はそこまではしな

い」、「するつもりはない」という事態が誰にでも普通にあるのです。マザー・テレサのような人についてさえ、それを指摘しようとすれば指摘できるでしょう。ということは、結局、皆、五十歩百歩ということでしょうか。私たちは皆、醜い山羊であり、左に追いやられるべき者たちでしょうか。「これらの小さな者のひとりになかったことは、わたしにしてくれなかったことなのである」。

このように話していると、「まあ、そう難しく考えなくてもいいじゃないか」と言いたくなります。「極端なことは言わないで、自分の出来る範囲で困っている人を助けるという話でいいんじゃないですか。」

いや、それで済ませてはいけないというのが私の考えです。いつもというのじゃないけれど、時には、聖書の言葉は納得できるかどうか、徹底的に考える必要があります。今日の福音箇所は16節もあって、かなり長い。しかも、繰り返しが多くて、くどいです。マタイは気合が入っています。そして、マタイ福音書によれば、この箇所は、イエスの地上での最後の教えです。マタイ福音書の特徴は、イエスが多くの言葉を費やして人々を教えられるということです。その多くの教えの最後を飾るのが、今日読まれた福音なんです。この箇所のあとはこうなっています。

イエスはこれらの言葉をすべて語り終えると、弟子たちに言われた。「あなたがたも知っているとおりに、三日後は過越祭である。人の子は十字架につけられるために引き渡される。」(26章1～2節)

「すべて語り終える」なんです。これ以後、イエスはもう言葉で教えることはありません。ただ、十字架の道を歩まれます。今日読んだ福音は、イエスが地上で最後に教えられた言葉なんです。ということは、「まあ、できる範囲で実行すればいい」という曖昧な勧めではないでしょう。もっと輪郭のはっきりしたことだと思います。

\*

私は、この聖書箇所が「王であるキリスト」の祝日の福音朗読であることに注目して読みたいと思います<sup>1</sup>。

A年の朗読が今日の箇所であるために、この祝日は最後の審判と強く結びつけられがちですが、B年<sup>2</sup>とC年<sup>3</sup>の朗読箇所を見ると、必ずしもそうではありません。この祝日が制定

---

<sup>1</sup> カトリック教会の聖書の読み方には二つの視点があります。一つは、マタイ福音書なら、マタイ福音書の流れの中に位置づけて読む仕方です。もう一つは、典礼暦年のどの日であるかに注目して読む仕方です。

<sup>2</sup> ヨハネ18章33～36節。「私の国は、この世には属していない。」

<sup>3</sup> ルカ23章33～43節。「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる。」

された理由<sup>4</sup>から言っても、テーマは最後の審判ではなく、「イエス・キリストは、今すでに私たちの王である」ということです。

今日は、「イエス・キリストは、いま私たちの王だろうか？」と問う日です。いや、「私たち」という話にすると、他人事になります。「イエス・キリストは、いま、この私の王だろうか？」と、自らに問う日です。それを自分で判定する基準の一つは、「自分の信仰生活の中で、困窮している人々の関わりはどのような場所を占めているだろうか」ということです。必ずしも、その種の活動に費やしている時間数やお金の問題ではありません。それが問題なら、援助NPOの専従職員か病院修道会のシスターとかだけが、「イエスを王としている」ことになるでしょう。

ふと訪れる困窮する人との接触、そのあり方に、自分のキリスト者としての生活の質がシンボリックに表れるということではないでしょうか。夏目漱石は私のヒーローだと言いましたが、その漱石が、「硝子戸の中」（6項、7項）で、こういう体験を書いています。彼は書齋に籠もってひたすら小説を書いていた人ですが、有名作家になると、自分の人生の物語を聴いてもらいたい人が訪れるようです。

ある晩、一人の女性が訪れて、そういう話を漱石にしました。それは「息苦しくなるほど悲痛を極めた」ものだったそうです。漱石はもちろんその内容を明かしていません。彼女は自死を考えていることもほのめかしました。夜も更けたので、話を終えて、漱石はその女性を門の外まで見送りました。こういう場合、家の外まで見送るということは、出来そうで、なかなか出来ないことです。彼女は「先生に見送っていただくのはもったいのうございます」と挨拶しました。「光荣でございます」とも言いました。漱石は「本当に光荣と思えますか」と念を押して、そしてこう言いました。「そう思うのなら、死なずに生きて居らっしゃい」。その女性のその後はわかりません。

漱石は困窮者の援助に多くの時間やエネルギーを費やした人ではありません。しかし、彼は訪れて息苦しい話をした人に耳を傾けて、そして門の外まで見送る人でした。こういうエピソードによって、彼の一生の事業であった文学がどのようなものであったかが、うかがい知れるのではないのでしょうか。ここにおられる皆さんの中に、援助事業に日夜尽力しておられる方というは多くはないでしょう。しかし、プライベートな仕方で、そういう出会いがふと訪れることはあります。その時の振る舞い方の中に、あなたの信仰者としての生活の本当の姿が表れているかもしれないと考えてください。

カール・バルトというプロテスタントの神学者がいます。最初は現場の牧師として活動を始めましたが、やがて神学者として尊敬されるようになり、二十世紀神学の金字塔と言われる「教会教義学」を書き上げました。たいへん難しい上に、何十巻にもわたる膨大な書物

---

<sup>4</sup> 1925年、ピウス九世教皇が、共産主義やファシズム体制の伸長、物質主義の隆盛に対抗して制定した。

です。しかし、晩年の彼は、自分が住んでいたバーゼル（スイス）の刑務所でだけで説教していました。刑務所でも説教したのではなく、刑務所でだけ説教したのです。「教会教義学」はキリスト教信仰全体を扱うもので、特別に困窮する人のことに集中したものではありません。しかし、受刑者を相手に熱心に説教する姿の中に、大神学者カール・バルトの信仰の姿が表れていると思います。

\*

今日の福音は、あなたは困窮する人の援助のためにどれだけの時間やお金を使っているかという「量」を問うているのではないと思います。いや、助けを必要とする人たちが数限りなくいるんですから、それも問われるべきでしょうが、今日の教えの中心はそこではないと考えます。

あなたの信仰生活の「質」を問うているのではないのでしょうか。人にはそれぞれ成すべき務めがあります。しかし、困窮する人との関わりは誰にでも起こる。そのときのあなたの振る舞いや心映えを通して、あなたのイエスとの関わりがわかる。人から裁かれるのではない。自分で自分がわかる。それが、今日、私が申し上げたいことです。

その目で今日の福音をあらためて読みますと、この福音は過酷でもありますが、寛大でもあります。生涯の間、一度も病人の訪問もせず、困窮する人のための募金に応じたことがないという人は稀でしょう。その数少ない実践について、イエスはこう言ってくださるのです。「これらの小さい者の一人にしたことは、わたしにしてくれたことなのである」。

ああでもない、こうでもないという話の運び方で、あまりミサの説教らしくありませんでした。いつでもこんな説教をしているわけではありません。私は、この個所について、断定的に「こういうことを言っているのです」と語る事がまだできません。それで、私が聖書と格闘してきたプロセスをそのまま話すことにしました。

創世記には、太祖ヤコブが神の使いと格闘するというエピソードがあります（32章）。神の使いはヤコブの執拗さに辟易して、「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」と頼みますが、ヤコブは「いいえ、祝福して下さるまでは離しません」と喰らいつきます。

今日の福音は、多くのキリスト者にとって格闘せざるを得ない個所だと思います。現代のキリスト者は、困窮する人たちの存在に敏感にならざるをえません。しかし、その一方で、困窮する人たちとの関わりを、自分と家族の生活のすべてにできるはずもありません。その真ん中で、私たちは迷っているのではないのでしょうか。今日申し上げたことは暫定的な結論です。これを微温的な勧めだと感じる人もあるでしょう。聖書と格闘するキリスト者たちを、神さまが祝福して下さいますように。

（了）